

平成 27 年度薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業報告書

< 事業名 > 村田町における地域包括ケアシステム構築に向けた多職種連携の試み

< 実施団体 > 特定非営利活動法人ふあるま・ねっと・みやぎ

< 事業の目的 >

当法人は、「セルフメディケーション推進支援」のための事業に取り組み、望ましい薬局・薬剤師の姿を模索してきた。前年度においては、健康推進拠点となり得る薬局の姿を模擬的に表現した企画を、仙台市において公開した。実施後の評価として、体験型のイベントのような目に見える形で発信していくことが「健康情報拠点薬局推進」にとってより効果的であることが示された。一方で、国が進める「地域包括ケアシステム」における多職種連携の中での薬局・薬剤師の認知度はいまだ高いとはいえない。セルフメディケーション及び包括ケアシステムにおいて薬物治療は根幹をなすものであり、薬剤師の関与が欠かせないことを他の職種の方々に知ってもらうための機会作りを目的として、村田町における健康イベントに参加する形で、地域の薬局および地域支援包括センター等との連携を試みる。

< 事業内容 >

- ① 「健康ふくし祭INむらた」における「地域の健康情報拠点型薬局モデル」の展開
- ② 薬剤師による健康講話とクイズ
- ③ 禁煙チャレンジャー体験
- ④ セルフメディケーションと薬局・薬剤師に関するアンケート調査
- ⑤ 本事業の補助ツールとして、2種類のリーフレットを作成

< 実施方法 >

町内の薬局・薬剤師および地域支援包括センターと連携して、村田町「健康ふくし祭INむらた」に参加する。

- ① 「地域の健康情報拠点型薬局モデル」をブースに設置し、調剤(模擬)、OTC薬販売(模擬)、薬と健康の相談、在宅医療の相談、健康指標の測定を実施。
- ② 禁煙チャレンジャー体験
セルフメディケーションにおける禁煙は確実に成果が現れる対策であることから、喫煙者及び周囲の人々の意識改革が欠かせない。一つのきっかけ作りとしてスモーカーライザーによる呼気中CO濃度チェックを行ない禁煙に導く。
- ③ 薬剤師による講話とクイズ
セルフメディケーションにおいて「いわゆる健康食品」の存在は無視できず、薬剤師が総合的に関わるべきであることから、健康食品情報を正しく伝えることを活動の根幹としてきた。世に出回っている「問題情報」を例にとり、だまされないための情報の読み方について話す。またクイズ「健康食品うそ、ほんと！」に答える形で問題点を確認してもらう。
- ④ 模擬薬局を一巡した人を対象に、セルフメディケーションや薬局、薬剤師に対するアンケートをおこなう。
- ⑤ 啓発用リーフレットを作成し配布する。また他のイベントでも使用する(各1000部)。
 - ・健康とセルフメディケーション
 - ・地域でおこなうセルフメディケーション

<実施期間・場所>

開催準備:平成27年7月16日から平成27年11月15日

実施日:平成27年11月15日(日) 9:30~14:00

実施場所:柴田郡村田町 町民体育館

<実施結果>

① 「健康ふくし祭INむらた」における「地域の健康情報拠点型薬局モデル」の展開

◆村田町町民体育館において開催された「健康ふくし祭 in むらた2015」は、主催:村田町社会福祉協議会・村田町ボランティア連絡協議会、後援:村田町、特定非営利活動法人ふあるま・ねっと・みやぎとして開催され、「健康・医療・相談コーナー」に出展した団体等は、村田町健康福祉課(包括支援センター・国保連合会)、みやぎ県南中核病院付属診療所・老人保健施設およびふあるま・ねっと・みやぎであった。

◆祭りの参加者は約360人、模擬薬局への来訪者は約150人であった。ブースの開店は10:30の予定であったが、10時前から多くの来訪者があった。

処方せん薬コーナー、OTC薬コーナーの他、健康食品や生活用品までそろえた薬局店内の様子をタペストリーを使って臨場感を出した。また血圧計や体組成計による測定もおこなった。





② 禁煙チャレンジャー体験には大勢の人が挑戦した。スモーカーライザー3台を用意したがフル回転状態であった。



③ 薬剤師による健康講話・クイズ

講話の時間帯とビッグバンドの演奏が重なったため、話す方も聴く方も最悪の条件であったにもかかわらず、熱心に聴いてもらった。特に隣りのブースで出展していた「保健推進員ヘルスマイト」の方々が興味深そうに聴いてくれたことは良かった。



④セルフメディケーションと薬局・薬剤師に関するアンケート調査

セルフメディケーション薬局を訪れた方に薬局体験の前後にアンケートをお願いした。

用紙配布者は約 80 人。解答用紙が回収できたのは 68 人。年代は 20 代から 80 代までであったが、50 代(11 人)、60 代(25 人)、70 代(12 人)が多かった。

セルフメディケーションの認知度では、聞いたことがある人が 25%いたが、内容を知っている人は 10%であった。全く知らないと未回答を合わせると 88%。

現在何らかの薬を飲んでいる人は 60%であったが、飲んでいる薬の内訳は処方薬は 46%、OTC薬は 2%であった。薬局に行ったことがある人は 85%であったが、目的の内訳は処方薬をもらうため 76%、OTC薬を買うため 10%であった。薬剤師の仕事と認識しているのは、調剤(回答数の 50%)、健康相談(23%)、在宅患者の薬の管理と OTC薬販売(12%)であった。OTC薬の利用については、時々使うを含めると 70%であったが、全く使わない人も 25%いた。購入先については 60%がドラッグストア、40%が薬局であった。

購入理由は、購入に便利 60%、相談できる 30%、安い・遅い時間でも買えるが 10%であった。OTC薬を買うときの薬剤師からのアドバイスについては、必要 71%、必要でない 16%であった。薬局体験後に、セルフメディケーションへの理解について聞いたところ、理解できたが 30%。なんとなく理解できたを含めると 75%の人が理解できたと答えた。未回答と理解できなかったは 25%。

アンケートの集計結果は別添資料に示す。

⑤セルフメディケーションを上手に進めるための啓発用リーフレットを配布した。

<考察>

全体としては活気のあるイベントで、来客数も予想を超えて多く達成感もあったが、例年地元のイベントとして定着しているところに、なじみのない薬局薬剤師のブースがなぜ出展しているかという意味をきちんと伝えられたかどうか懸念され、もう少し事前準備が必要であった。参加の仕方に制限があったこと及び薬剤師側の人手が足りなかったことが大きく、実際には村田町の保健センター、保健福祉課の職員の方々及び仙台から参加した市名坂薬局の皆さん、薬学実習生の皆さんの力を借りてなんとか成功したといえる。地元の薬局・薬剤師(薬剤師会)の参加が他の行事等と重なりゼロに近かったことはきわめて残念なことであった。この点については今後の課題の項で述べる。以下に個々の事業について考察する。

1. 「健康ふくし祭INむらた」における「地域の健康情報拠点型薬局モデル」の展開

(経緯)

村田町の公式発表では、村田町の人口は約 12,000、世帯数は約 3,600 であり、仙台市中心部の一学区よりも規模の小さい町であり、国が進める地域包括ケアシステムにおける一単位にほぼ該当すると考えられる。

当法人は、2015 年 2 月、3 月の 2 回、村田町保健センターの町民向け講座に講師を派遣する中で、当町の保健福祉への取り組みや課題などを知る機会を得た。地域包括ケアシステム構築を進める中で、特に薬局・薬剤師との接点がないことが明らかになり、薬剤師が運営する NPO 法人として多職種連携のきっかけ作りをしたいと考えた。ひとつの方法として、あるべき薬局の姿を行政や町民に知ってもらうことを提案した。

当初の計画では、村田町の協力を得て単独実施を考えていたが、各種行事が多い中で、現地の職員や町民の負担が大きすぎるとの判断から「健康ふくし祭」への参加の形をとることになった。

(薬局・薬剤師の参加)

当初の計画では、当法人の役割はあくまで「きっかけ作り」とし、現地の薬局・薬剤師（薬剤師会）との協働を考えていたが、町内の薬局・薬剤師の意識は高くはないことがわかった。意欲を見せた薬局もあったが当日の参加は無理との回答であった。仙南薬剤師会も主旨には賛同を示したが当日他のイベントと重なったとのことで参加はなかった。最終的に、参加の意義を十分に感じてスケジュール調整をしてくれた一薬局の参加によってようやく形ができたことは成果の一つ考えたい。

(模擬薬局の展開)

模擬調剤では丁寧な説明に質問や相談が多数寄せられた。薬局・薬剤師の仕事や上手に薬局を利用することの大切さを理解してもらえたと思う。

OTC薬のコーナーでは、空き箱陳列が目をついたのか「購入できるか」という声も聞かれた。模擬購入体験を多くしたかったが通過型の参加者が多く、会場も騒然としていたので予定通りにはいかなかった。

体組成測定等の測定コーナーが大盛況で、保健師さんの手際のよい応援でスムーズに進めることができた。

2. 禁煙チャレンジャー挑戦

測定の一環と思ったのかスモーカーライザーにも抵抗なくチャレンジしてくれたことは収穫であった。大勢の町民が短時間に集中したので測定結果の確認のみになってしまい、禁煙指導までには至らなかったが禁煙の大事さは伝えられたと思う。薬学生の皆さんにとっては一般の人々に接する有益な実地経験となったと思われる。

3. 薬剤師による健康講話・クイズ

健康食品と呼ばれる食品群の実態と「効く、効いた情報」がどのように作られていくかについて話した後、「健康食品うそ・ほんと」と題してパネルを用いてQ&A方式で説明をした。

昨年4月から施行された新機能性表示食品制度により、ますます健康食品の情報に歯止めがかからなくなっている状況を理解してもらえたと思う。

ウコン、ブルーベリー、イチョウ葉、ヒアルロン酸、アガリクス、納豆、酵素などについて、クイズ形式で尋ねたところ、間違った情報が信じられている様子が推察された。

4. セルフメディケーションと薬局・薬剤師に関するアンケート調査

(セルフメディケーションの認知度)

セルフメディケーションという言葉が一般の人々の目に触れるようになってから久しいが、その意味の認知や実践に関してはほとんど進んでいない。

今回のアンケート調査でもそのことは明らかで、約90%の人は全く知らないか無回答であった。しかし今回模擬薬局を体験した後では、未回答と理解できなかったが25%に減り、理解できたが30%。なんとなく理解できたを含めると75%の人が理解できたと答えたことは大きな成果であった。

(医薬品の服用)

現在何らかの薬を飲んでいる人は60%であったが、飲んでいる薬の内訳は処方薬が46%、OTC薬が2%であった。この数値の意味するところは今回のアンケートでは不明であるが、重要な意味を持つかもしれない。「薬」の定義や種類を理解してもらった上で回答してもらえばもっと違った結果になったかもしれない。薬を服用している人の半数が処方薬とOTC薬(市販薬)以外の薬を飲んでいること

になるが、地域では配置薬の存在が大きいのかもしれない。自分が飲んでる薬が何かわかっておらず、健康食品を薬と思って飲んでる人もいるのではないかという疑問もわく。

(薬局とOTC薬販売)

上記薬に対する認識と同様、薬局に対する認識にも問題があるように思われる。

一般に薬を売っているところはすべて薬局だと思っている人も多い。

85%の人が薬局に行ったことがあり、その目的の10%がOTC薬を買うためとしている。また購入先の40%が薬局と答えている。しかし、実際に村田町内の薬局を訪問したが、OTC薬を普通に販売している薬局は見当たらなかった。

購入理由は、購入に便利、相談できるの2点で約90%を占め、安い・夜間対応にはあまり期待していないようである。

OTC薬購入に際して、専門的アドバイスが必要と答えた人が70%であったことは一応薬剤師の存在意義が認められていると考えられる。

5. セルフメディケーションを上手に進めるための啓発用リーフレットの配布

①セルフメディケーションと健康・・・セルフメディケーションの考え方を生活に取り入れるときのポイントや注意点をまとめてある

②地域で行うセルフメディケーション・・・セルフメディケーションから介護まで、地域住民を多職種で支えるしくみと連携についての呼びかけ

2種類のリーフレットは、イベント当日の配布の他、出前講座の補助資料としてまた、会員薬局の店頭で配布していく予定である。

<評価と課題>

1. 多職種連携

本事業の企画および実施準備の過程で、村田町保健センター、保健福祉課(地域包括支援センター)の職員の方々との打合せの機会を作っていただいた。この打ち合わせにより、実施当日のスムーズな運営が可能になったばかりではなく、薬局・薬剤師の本来の役割や当法人の方針などについてより理解を深めていただけたことが何よりの収穫と評価している。

当初目的とした「多職種連携の試み」については、薬局・薬剤師側の取り組み姿勢にまだまだ不足する部分があり、せっかくのチャンスを生かせなかった。しかし最終的にアイン薬局村田店(薬剤師鈴木聡さん)の参加によって、薬剤師の窓口を行政側に示すことができたと考えている。

村田町においても要介護人口が急増することが予測され、町としても包括ケアシステムの構築を急がねばならないと伺った。薬局・薬剤師が新たな認識を持って対応して欲しい。

今回のイベント参加の後に、村田町保健推進員会定例研修会における講話依頼(保健センター)があり、2回延べ50名に「自分の健康を守る～セルフメディケーションとは～」について話した。次いで、村田町地域包括支援センターからも講話の依頼があり、話を進める上で2種類のリーフレットを有効に活用できた。

2. セルフメディケーションと薬局・薬剤師

セルフメディケーション推進を唱えるばかりでは、人々は戸惑うばかりである。国の政策の矢継ぎ早の変更などで、薬や食品の制度が利用者にとって不親切なものになっている。制度や仕組みについても丁寧に伝え間違った認識や選択をしないための啓発活動も薬局薬剤師の大事な役目であり、地域

のイベントなどに積極的に参加すべきである。また、関連する冊子やリーフレットなども有効に使って自ら情報発信をして欲しい。